

野生動物による農業被害拡大の背景にあるもの

従来は里でみることのなかった動物が増加し、野生動物による農作物への被害は年々拡大している。野生動物の増加の背景には、どのような環境の変化が起きているのだろうか。



麻布大学の博物館
上席学芸員
高槻成紀

はじめに

「最近、野生動物が増えて、農業被害が大きくなってきているらしい」と聞く。「日本は先進国であり、自動車産業に代表されるように工業立国であり、都市化が進んでいるはずなのに、本当だろうか？」という疑問はもつともなことだ。人口の大多数が都市生活を送るようになった現在、野生動物が増えているのを実感することはないので当然である。ここではその実態と我々の社会がそれに対してどういう向き合い方をすればよいかを考えてみたい。

ひと口に野生動物と言ってもさまざまなものがおり、農業被害にもさまざまなある。しかも農業を広く林業まで含めればさらに多様な内容を含むことになる。そこで理解を助けるために、問

すようになった野生動物ということから、主に中型 大型の哺乳類を取り上げることにする。

農業被害は田畑の耕作物、つまりコメや野菜、イモや果樹などが野生動物に食べられることである。林業被害は植林した木がシカなどに食べられることである。

被害の実態

【大型獣】

クマは北海道にヒグマ、本州以南にツキノワグマがいる。北海道ではトウモロコシやメロンなどの被害が深刻だが、ヒグマは非常に大きく、力もあり、鋭い爪を持っているので、家畜や人が襲われると重傷あるいは死亡事故になることもある。クマは不思議な動物で、冬眠するのはほとんどが小型哺乳類なのだ。クマは冬眠をする。そのために秋に大量のドングリを食べ、デンプンを脂肪に変えてそれを消費しながら越冬する。ところが、ナラやブナなどのドングリ（堅果という）はなり年（豊作）と不なり年（凶作）があり、山の木が同調して凶作になる

たかつき・せいき

一九四九年鳥取県生まれ。麻布大学の博物館上席学芸員。東京大学、麻布大学教授を経て、現職。専門は生態学、保全生態学。ニホンシカの研究を続ける一方、タヌキなども調べている。最近では玉川上水の生き物も調べている。動物物の素嗜らしさを子どもに伝えたい。著書に『野生動物と共存できるか』『動物を守りたい君へ』『岩波ジュニア新書』『唱歌「ふるさと」の生態学』『ヤマケイ新書』『シカの生態誌』東大出版会、『都会の自然の話を聴く』（彩流社）、『人間の偏見 動物の言い分』（イースト・プレス社）など。

題を整理しておきたい。

「野生動物」というとき、「動物」は鳥類や魚類、昆虫まで含む。現に害鳥とか害虫とかいう言葉があるのだから、これらが農業被害を起こすことは間違いない。しかしここでは「動物」を哺乳類に限定するものとする。

野生の哺乳類と聞いてイメージされるのはクマではないだろうか。クマは日本列島最大の陸生哺乳類であり、ときに深刻な人身被害をもたらすことがあるため、出現しただけで大騒ぎになる。クマのほかではシカ、イノシシもイメージされるだろう。これらは体重が五〇キログラム以上の大型獣である。中型としてはサル、キツネ、タヌキなどのほか外来種のハクビシン、アライグマもあり、小型ではリス、ネズミなどがいて、農業被害といえばネズミが深刻である。だが、ここでは最近被害を及ぼ

とクマは深刻な食物不足になり、普段は行かない里山に出没してトウモロコシや果物などを食べる。

イノシシの場合は奥山にもいるがどちらかといえば農業地帯に多い。それはイノシシが雑食性で、シカに比べれば栄養価の高い食物を必要とするため、農作物を食べようとする程度が強いからである。雑食性であり、昆虫やミミズなども食べ、とくに地下の動植物を掘り起こす点が特徴的である。また一度の出産で数匹の新生児が生まれるので、条件が許せば非常に繁殖力が強い。畑のイモや野菜などをよく食べるし、掘り起こしてミミズなどを食べるので、畑が荒らされる。

シカは植物の葉を食べる。葉は細胞壁が丈夫なので、ふつうの哺乳類は利用しにくい。だがシカやウシなどの反芻獣は四つの胃を持っていて、食べた葉を口に逆流させて何度も咀嚼し、胃内の微生物に発酵させるという消化生理を持っている。シカは臆病なため、安全でなければ農地に侵入しないが、危険がないことが確認されると侵入し、大食なので被害が大きい。牧場の牧草への被害も甚大であるし、林業被害も大きい。シカはクマのように人身被害を起こすこともなく、イノシシのように産仔数も多くなく、臆病であるが、実は恐ろしい面がある。ひとつは雪国などでは冬に道路にシカが突然現れると、走行車が急ブレーキを切つてスリップ事故を起こしたり、対向車と衝突事故を起こすことがある点である。シカがユニークなのは農林業被